

## カバーガラスの下の生き物達

大久保 泰和

きのこの細部を見るためには顕微鏡が不可欠です。きのこの菌糸などを観察するには、スライドガラスに試料を載せカバーガラスで水封します。封水中には目的の胞子や菌糸が見えるのですが、しばしば意外な生き物が、まれに生きた状態で観察されることがあります。以下は、この数年間に顕微鏡下に現れた生き物達を紹介させていただきます。

写真番号に\*を付けた写真のスケールは1目盛4 $\mu\text{m}$ です。他はすべて1目盛10 $\mu\text{m}$ です。

### (1) 植物

写真1：緑藻と呼ばれている植物で、ウズラタケ(写真2)をカバーガラスに伏せて胞子を採取した時に落ちてきたものです(目的の胞子は落ちませんでした)。硬質菌の傘表皮によく見られます。

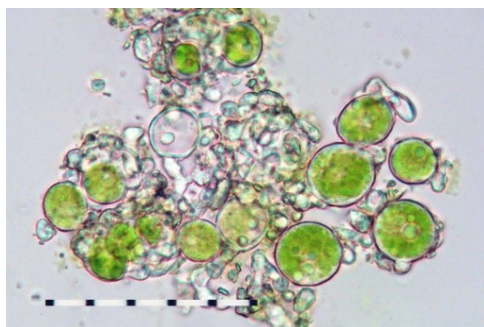


写真1 緑藻の仲間



写真2 ウズラタケ

写真3：シロキツネノサカズキ(写真4)の椀の中に住んでいた珪藻の仲間です。似たような形の珪藻を近くに並べてあります。珪藻は、単細胞生物で、一組の合わせたシャーレのような殻を持っているそうです。

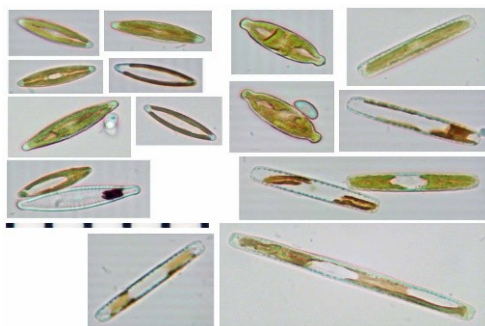


写真3 珪藻の仲間-1



写真4 シロキツネノサカズキ

写真5：カンムリタケの柄に絡まった菌糸の中にもいた珪藻です。こちらは内部の詳細な構造まで観察することができました。



写真5 珪藻の仲間-2

写真6：緑色なので植物だろうと思いますが、ミカツキモという仲間に形が似ています。微小な子囊菌の胞子とともに観察されました。

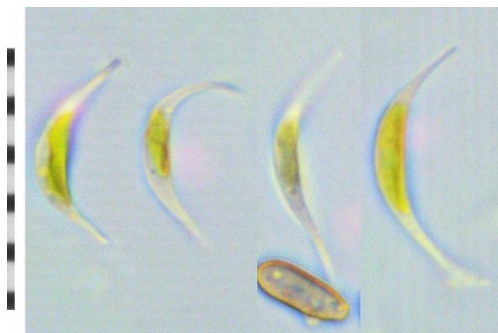


写真6\* ミカツキモ?

## (2) 動物

写真7：アラゲコベニチャワンタケの仲間の子実体上にカバーガラスを置いて胞子を採取した際、線虫の仲間が生きた状態で紛れ込んでいました。体長は1mmを超えます。体をくねらせるようすは、非常に不気味。「きのこ動物(相良直彦 築地書館1989年)」には、菌食する線虫がいること、ヒラタケの仲間が線虫を殺して食うことが書かれています。



写真7 線虫の仲間

写真8：ウラベニガサ属(写真9)の傘表面にあったもので、何者か見当が付きません。長い針状の毛と左側表面に微毛が生えています。節足動物の一部のように見えます。



写真8 節足動物の一部?



写真9 ウラベニガサ属のきのこ

写真10：短い毛に被われた昆虫の触角のようなものです。正体不明です。微小な子囊菌の周辺にあったようです。

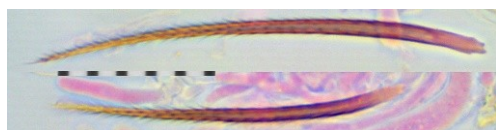


写真10\* 微毛の生えたひげ状のもの

写真11：シロキツネノサカズキの椀の中から出てきた多分ウサギワムシというプランクトンです。尾のようなものが付いています。多少押しつぶされています。



写真11 ウサギワムシ

写真12:コテングタケモドキの胞子と一緒に落ちてきたもので、チョウかガの鱗粉だということです。似たようなものは何度か観察しています。

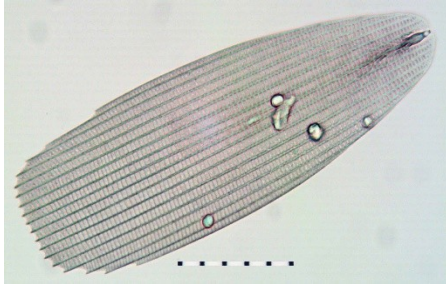


写真12 チョウかガの鱗粉

写真13:地上に群生したコマ型子囊菌の胞子とともに観察されたダニの仲間です。カバーグラス下で圧死したと思しく、体長は100 $\mu$ m強、体節や脚の爪まで克明に見ることができます。



写真13 ダニの仲間

### (3) きのこ以外?の胞子

写真14:ウラベニホテイシメジのひだに紛れ込んでいた、星形の胞子です。多数の隔壁があります。これも多分子囊菌の胞子であろうと思われますが、このような面白い形状の胞子を作る菌を観察してみたくになります。



写真14\* 子囊菌の星形胞子(KOH処理)

- 以上のように、きのこには肉眼では見ることのできない多数の生き物が纏わり付いているものと想像されます。わずかな水分でもあれば、水棲の生き物も生存できるようです。
- 特に盤型～椀型の子囊菌きのこの内側には、種々の生き物が棲息しているものと思われます。ここが本来の居場所なのか、不本意にも迷い込んでしまったのかは不明です。この形状の子囊菌の胞子は、カバーグラスを盤・椀の上に置いて噴出したものを採取していますが、胞子と一緒に吹き飛ばされた生き物を観察しているようです。子囊菌の胞子噴出力は大したものです。
- 顕微鏡下では、本来の目的を忘れるほど興味深い風景に出会うことがあります。「異端を攻むるは害あるのみ」と言いますが、せつかくの機会なので、封水が乾かない間に深入りしない程度に楽しむべきであると思います。
- 紹介した生き物の判別については、あまりあてにならないことをご了承ください。ただ、「淡水プランクトンのページ」というHPから多大な情報をいただきました。